新屋

まちづくり基本構想

秋田市

平成26年3月

まちづくり基本構想について

私たちの住む「まち」には、それぞれの個性があります。そして、「まちづくり」に一番大切なことは、そのまちに住む一人ひとりが、自分の暮らすまちの個性に誇りと愛着を持ち、「いつまでもここで暮らしたい」「もっとよいまちにしたい」と思う心を育むことです。

各地域における歴史や文化は、まちの誇りと愛着の源泉です。こうした地域の歴史と文化を学び、次の世代に継承することは、脈々と引き継がれるまちづくりの原点でもあります。

少子高齢化が進行し、人口が減少する社会情勢の中、元気な秋田市をつくるためには、地域自らが文化や歴史を将来に伝えるため、保存・継承や人材育成に取り組むなど、成熟した豊かな地域社会の形成を目指していく必要があります。

本市では、「ともにつくり　ともに生きる　人・まち・くらし」を基本理念に掲げ、市民との協働によるまちづくりを進めており、秋田市を元気にし、次の世代に引き継ぐためには、住民自らが地域課題に対して危機感を持ち、将来に向けたまちづくりに動いている地域に対して、必要な支援を行い、その地域に関わる市民とともに取り組んでいきたいと考えています。

この「新屋まちづくり基本構想」は、平成25年7月にあらやまちづくり懇談会からなされた「秋田公立美術大学を活かしたあらやのまちづくり」の提言を基に、ワークショップにおける地域の皆さんの意見を踏まえながら、その地域固有の豊かさの形をつくり、地域を元気にするための活動人口を増やし、本市における地域活性化のモデルにすることを念頭に、住民主体のまちづくりの方向性をまとめたものです。

今後も、市民の皆さんが自らまちづくりを話し合い、活動すること、そして市が市民の活動を支える環境づくりを進め、住民主体のまちづくりのさらなる推進を目指すものです。

平成２６年３月

目　次

1 まちづくりの「方向性」

現状と課題 ……02
まちづくりのコンセプト ……04
まちづくりの拠点施設の必要性 ……08

2 まちづくりの「拠点施設整備について」

整備場所について ……10
施設機能 ……12

3 まちづくりの「課題」

地域活動との連動について ……16
施設整備について ……17
管理・運営について ……18
今後のまちづくりについて ……19

1

まちづくりの「方向性」

現状と課題

現 状

課 題

新屋の歴史・文化

●新屋は、秋田～酒田を結ぶ羽州浜街道（北国街道）の宿場町であり、雄物川水運の川湊でもありました。

●雄物川により形成された、海岸線を南北に走る河岸段丘（新屋砂丘）の裾野に開けており、豊富な湧水があります。昭和初期までは湧水や井戸が500か所以上あり、皆の台所として使用されていました。その名残は、現在も表町の道路沿道にある４か所の湧水に伺うことができます。

●良質な湧水、そして水運により雄物川流域から運ばれる米を利用して醸造業が発展しました。新屋の酒造業者は、古くは1754年（宝暦4年）には6軒、最盛期には12軒あったそうです。

●湧水は味噌・しょっつる・醤油など、その他の地場産業の発達にもつながっていました。かつては、うどん・白玉製造も盛んで、幕末には京都方面まで移出され、繁盛したとの記録も残っています。昭和の時代には、地元でサイダー製造・販売も行われており、水と共に発展した歴史と文化が新屋には根付いています。

歴史的な町並みの保存・活用

歴史ある羽州浜街道沿いの表町地区には、現在も酒蔵を始め、切り妻屋根・妻入りの町家が多く残っています。国登録有形文化財である國萬歳酒造や森九商店を含め、歴史的建造物もありますが、商店街・地場産業の衰退とともに、空き地や空き家が目立つようになっており、数年前には酒造会社の一つがなくなり、歴史ある町並みが失われつつあります。

地域資源である歴史的な町並みが将来に残されないとの危機感が募っています。

地場産業などの地域資源

近年、住民の高齢化や商店街の衰退が進んでいるとともに、かつて盛んであった醸造業をはじめ、新屋の地場産業も活性化が必要な状況にあります。

地場産業の復活や商店街振興など、地域が主体となって地域活性化に取り組む体制が確立されていない状況にあります。

秋田公立美術大学との連携

平成25年4月に、秋田公立美術大学が開学し、地元において芸術・文化に関わる人材育成が期待されますが、美術工芸短期大学時代は、卒業生の地元での雇用の場は限られており、アーティスト・作家として独立するためのノウハウを学ぶ場を求めて、県外に流出している状況にあります。

美術大学の卒業生が地元で起業定着できる環境を整える必要があります。地元から芸術・文化を発信するなど、今後は「美術大学のあるまち」としての地理的メリットを活かす必要があります。

まちづくりのコンセプト

まちづくりの目的

新屋表町地区の歴史ある町家を保存・活用し、都市景観にも配慮した魅力ある町並みを創る。
美術大学の卒業生や若手アーティストを育てる環境を整え、「大学のあるまち新屋」のイメージを創る。
かつて盛んだった地場産業のイメージを取り入れ、新屋の歴史も彷彿させながら、地場産業、商店街、そして地域全体の活性化につなげる。

●コンセプト

芸術と文化が薫るまち新屋

歴史・文化の継承

新屋の歴史を踏まえ、表町周辺の町家、醸造・しょっつるなどの地場産業という地域資源の活用

ものづくりの精神の伝承

良質な湧水と水運により雄物川流域から運ばれる米を活かした地場産業における「ものづくり」と、美術工芸短期大学時代から、今後も美術大学に引き継がれる「ものづくり」の精神の伝承

新屋は歴史・文化が蓄積した魅力ある町並み、そして湧水に育まれた地場産業と平成25年４月に開学した美術大学という新旧の「ものづくり」という地域資源に恵まれた場所です。この２つを柱に、「芸術と文化が薫るまち新屋」の実現を目指します。

提案書・ワークショップから

提案書では

●周辺の古い町家の活用と保存
●新政酒造跡地の利活用（核となる施設の整備）

ワークショップでは

市民（地元）と行政（市）の協働による「まちづくり」の取組についての意見交換がされました。
まちづくりに活かしたい新屋の地域資源は…（第2回WSより）

「見る」

●周辺の町家蔵（渡幸さん）
●秋田晴酒造・國萬歳・森九商店・美大の蔵
●忠専寺・天龍寺
●葉隠墓苑
●愛宕地蔵堂・緑町地蔵
●日吉神社
●鹿島まつり・山王祭
●桜・雪まつり
●大川散歩道
●新屋大川端帯状公園

「住む」

●住む場所がない
●空き家・空き部屋の活用
●町家の活用（アトリエ・工房等）
●新屋温泉

「食す」

●しょっつるは新屋が元祖！ 魚醤サミット等で活性化を
●高長すし、萬八、わたゆう、幸運堂、栄月すし、美大の学食などがあるが、若い人がもっと気軽に食べられる場所が欲しい
●復活してほしいメニューがある
（うどん、サイダー、アイスキャンディー、せんべい）
●昔からある新屋の味を「食べ方」から提案・発信（塩麹のブームのように）

「買う」

●駄菓子屋
●画材屋・本屋など美術関連の店がない
●みそ、米麹、しょうゆ、酒、しょっつる、甘酒等をその場で食べられるように工夫

「創る（作る）」

●今までにないものを創る
●今あるものを活かして作る
●行政ではなく新屋のまちの人がつくっていく施設
●つながりを育むような施設

新屋の個性は

「歴史ある町並みと地場産業などの歴史・文化」
そして
湧水に支えられた醸造など「これまでのものづくり」と
美大を活かした「これからのものづくり」

まちづくりの方向性

【新屋らしさ】

地域資源の活用

平成18年度に市と美術工芸短期大学・地域が協働で取り組んだ「新屋表町通り景観まちづくり」の際に実施した沿道の住民意識調査では、住民の多くが「昔ながらの建物が多く残っている」「湧水が点在している」ことが表町通りの魅力であるとしています。

表町周辺を「歴史・文化エリア」と捉え、町家の保存・活用による統一感のあるまちづくりを進めるとともに、町家・歴史的建造物には醸造業が多いことから、醸造を中心とした地場産業の活性化を目指します。

【人材育成】

作家・アーティスト、地域の人材育成

地域の人材育成を視野に、美術大学の学生が、制作活動ができる環境を整え、「地域とともに歩む大学」の実現を目指すとともに、卒業後も秋田に定住し、地元での作家・アーティストとしての独立、起業に向けた経験を積むことができる場を整備します。

また、地域資源を活かし、歴史・文化を継承できる地域の人材育成を図ります。

【地域交流】

住民活動の活発化・公立美術大学との連携

これまでも新屋で行われてきた「まちづくり」活動のつながりを強めるとともに、美術大学と連携し、地域資源の活用、芸術・文化を通した地域住民の交流を促進します。学生の起業支援、若手アーティストの定住促進により、活気のあるまちをつくります。

住民が身近に芸術文化に接することのできる機会を増やし、地域交流を活発にすることで、商店街も含めた地域の活性化を図ります。

具体の取組

「芸術と文化が薫るまち新屋」の実現には、地元の皆さんが主体となったまちづくりの動きを欠かすことはできません。

「歴史・文化の継承」は、「新屋」という土地の歴史を背景に培われてきた固有のアイデンティティを「見つめ直し」、「育て」、「継承する」ということであり、新屋の歴史・文化を知っている市民の皆さんが関わることで、厚みを増していきます。

表町周辺の町家をどのように活かし、将来に残すのか、新屋の醸造・しょっつるなど地場産業をどのようにして次の世代に伝えていくのか、地域主体の取組が重要です。

また、「ものづくりの精神の伝承」は、良質な湧水に支えられた醸造をはじめとする地場産業を「これまでの新屋のものづくり」と考えれば、平成25年4月に開学した美術大学を中核とする芸術・文化は、「これからの新屋のものづくり」と言えます。

ものづくりを介して、幅広い世代が交流し、活性化に取り組むことが必要です。

ワークショップ意見のまとめ

（考えられる取組を意見をもとに例示しました。）

▶歴史・文化の継承

「見る」

●まち歩き（散策ルート）
湧水・文化財・町家・お寺・神社等
桜まつり・雪まつり
→地元の歴史伝承
観光ガイド育成へ

「住む」「見る」

●空き家の活用
シェアハウス・アトリエ・ギャラリー等
（アーティストの住居・長期滞在に対応）
→学生・若手アーティストの活動環境整備
※所有者の理解を得ながら
町家を活用した生きた町並みの保存
「芸術・文化のまち」のイメージ確立へ

「買う」「食す」

●地場産業や地元飲食店の連携による新屋の味（名産品）のPR
→地場産業・商店街の活性化へ空き家の活用（画材屋・本屋等の店舗兼ギャラリー）
→商店街の活性化へ

▶ものづくりの精神の伝承

「作る」「創る」「育てる」

●美大生・若手アーティストが作家としてのノウハウ取得、起業までの技術錬成ができる環境の整備
●一般市民が制作体験できる場の整備
→人材育成と地域交流の活性化へ

「見る」「買う」

●作家の作品展示・販売
→人材育成
ニーズ把握や商談など起業までのノウハウ取得

地域の動きでは…

●もの×まち　さんぽ
…手づくり品市
●あらら家プロジェクト
…美術大学の学生による学外シェアアトリエ
●「湧水の郷」を後世に
等、新屋の魅力を発信し、地域資源を活かす取組や、ものづくりにつながるイベントも数多く行われています。

まちづくりの拠点施設の必要性

これまでの地域でのまちづくりの取組も踏まえ、「芸術と文化が薫るまち新屋」の実現に向け、新屋の歴史・文化の継承、そしてものづくりの技術や精神を伝承しながら、世代や職種を超えた交流ができる場があれば、まちづくりを活発にすることができます。

必要性❶

地域資源を結び、活かす拠点

表町周辺に点在する地域資源を結び、それらを活かしたまちづくり活動の拠点となる施設が必要です。

表町の歴史ある町並みを残すためには、周辺の町家や湧水を活かした住民主体の地域活動と連携できる場とする必要があります。

必要性❷

地域のものづくりの歴史を伝える施設

地域住民自らが運営に関わり、地域の人材を育成しながら、新屋の地場産業の歴史や現状を紹介し、表町の醸造業等、これまでの地域の「ものづくり」の歴史を伝えたり、地場産品などを販売・PRできる場が必要です。

必要性❸

芸術・文化による
まちづくりができる施設

美術大学の学生や若手アーティストが新屋のまちなかで制作活動を行い、また、作家となるためのノウハウを身につけることができる場が必要です。

美術大学と連携し、「ものづくり」の精神を伝承していくとともに、周辺の町家・空き店舗の活用とあわせて、美術大学の学生や若手アーティストがまちなかで日常的に活動し、地域住民との交流ができる場が必要です。

提案書では

「あらやらしさを活かす」「じっくり育てる」「地域との交流・参加」の拠点

ワークショップでは

- 行政ではなく新屋のまちの人がつくっていく施設
- つながりを育むような施設
- 外から人を呼び込める施設
- 街道の駅

ものづくりの精神を伝承することで、提言を実現するための拠点施設の整備を想定します。

2

まちづくりの「拠点施設整備について」

整備場所について

●今後のまちづくりには、美術大学との連携は不可欠であり、歴史ある町並みの活用、地場産業の活性化、美術大学の学生のまちなかにおける制作環境の整備が求められています。

●地域資源を活かしたまちづくりを進め、他地域からの人を呼び込むには、ＪＲ新屋駅、西部市民サービスセンターのバスターミナルなど、公共交通の利便性も考慮する必要があります。

●こうしたまちづくりの拠点となる施設は、美術大学とＪＲ新屋駅から等距離で、両地点との動線をつなぐことができる場所、点在する地域資源と連携した取組ができる場所とすべきであり、醸造業を含む古い町家が点在し、湧水がある新屋表町地区が望ましいと考えられます。

●新屋表町地区において、これらの条件を満たし、一定の面積が確保できる場所としては、地元から提案された「新政酒造株式会社新屋工場および秋田中央銘醸株式会社跡地」が適地と考えられます。

地　番：秋田市新屋表町104-4
面　積：6,588.05㎡（登記面積）
所有者：新政酒造株式会社

まちづくりのエリアの考え方

地域資源とのつながりは、WSにおける意見をもとに整理しました。

※同地は現在民有地ですが、表町地区を中心とした新屋まちづくり拠点施設の適地と想定して、「まちづくり基本構想」をまとめるものです。

施設機能

「ものづくりの精神の伝承」をコンセプトに…

地域が主体となったまちづくりの拠点整備を検討します。

工　房

●美術大学の卒業生の技術研鑽・育成の場として整備し、地元秋田での作家としての独立を支援します。
これまでの美術工芸短期大学時代は、県内で作家として独立できる環境が整っておらず、短期大学の専攻と異なる職種に就職したり、県外に就職する卒業生が多く見受けられました。

●作家として必要な機材は、初期投資が大きいものもあることから、起業・独立を目指す大学卒業生などが活用できる工房を中心に環境整備を図り、秋田市内で作家としてのノウハウを身につける場を作るものです。

●「ものづくり」の精神を継承するために、美術大学の学生だけでなく、広く若手アーティストが制作活動に使えるほか、一般市民の方々も活用できる体験・指導型の工房を想定します。

あきたガラスフェスタ

●工房については、美術大学ものづくりデザイン専攻の学生の受入れ、育成のため、段階的に充実させていくことを想定し、市民に認知されている「あきたガラスフェスタ」の実績を踏まえて、当初はガラス工房からの整備を想定します。

提案書では

ガラスアーツフェスタなどで市民の人気を集めているガラス工房を中心に、徐々に他分野に拡げていってはどうか

●ガラス工房からスタートすることにより、県外（特に富山ガラス研究所など富山中心）に流出している美術工芸短期大学卒業生や本県出身のガラス作家が秋田に戻る機会や、これからガラス作家を志す者を県内に定着させる機会にもなると考えられます。将来は、富山ガラスと日本海沿岸での交流など、波及効果も考えられます。

●ワークショップにおいて出された新屋の地域資源においても、醸造業や清涼飲料水などのガラス瓶、湧水や地下水など「水」の透明感のように、ガラスにつながるものもあることから「新屋＝ガラス」のイメージを創ることもできます。

ワークショップでは

新屋の地場産業とのつながり
◎醸造業が盛んだった＝酒瓶
◎清涼飲料（サイダー・ラムネ）が作られていた＝ガラス瓶
◎うどん・白玉も作られていた＝水（湧水があったから）
◎湧水・地下水＝透明感。水を注ぐ器はガラス
ガラスは生活に近い芸術
◎ガラスフェスタも市民に好評であるが、ガラスコップや皿など、食とも切り離せないもの

〈あきたガラスフェスタとは…〉

平成17年（2005年）から、秋田にガラス文化を根付かせるため、美術工芸短期大学等を会場に始められたもの。秋田に「ガラス」という種を蒔き、一人でも多くの市民がガラスに触れ、楽しんでもらうことで、ガラス文化が根付くことを目指し、平成25年で9回目となりました。

■最近5年間の状況

回	開催年	概　要
第5回	平成21年（2009年）	◎ガラスギャラリー（秋田ニューシティ） ◎オープンスタジオ（公開制作）、ワークショップ（制作体験）：美術工芸短期大学・アトリエももさだ
第6回	平成22年（2010年）	◎8/31 ～ 9/5　オープンスタジオ　ガラスワークショップ ◎8/31 ～ 9/5　ガラスギャラリー展示即売会 ◎9/ 8 ～ 9/30　ＧＬＡＳＳ　ＦＯＯＤ 市街地飲食店において、食の達人とガラス作家のコラボレーションを実施
第7回	平成23年（2011年）	◎9/10　ガラスワークショップ（制作体験、手型制作、吹きガラスワークショップ） ◎9/1 ～ 9/11　ガラスギャラリー・展示即売会（食器のさかいだ） ◎9/1 ～ 9/25　ＧＬＡＳＳ　ＦＯＯＤ 前年に引き続き、市街地飲食店において、食の達人とガラス作家のコラボレーションを実施
第8回	平成24年（2012年）	◎7/12 ～ 10/20 市内複数会場で秋田ゆかりの作家による作品展示・販売 ◎7/12 ～ 9/4　卒業生ガラス作品委託販売（秋田贔屓） ◎8/31 ～ 9/9　卒業生30人＋秋田のガラス作家作品販売（アトリエももさだ） ◎10/6 ～ 10/15 卒業生30人による作品委託販売（食器のさかいだ） リレートークや音楽祭など関連イベントも開催 ◎9/26　ガラスリレートーク（ココラボラトリー） ◎10/20　日吉の杜　あらや音楽祭において作品展示
第9回	平成25年（2013年）	◎8/10 ～ 9/8　展示即売会　公開作家・美大卒業生のガラス作家作品販売 ◎8/30 ～ 31　公開作家（３人）によるワークショップ（美大） ◎9/1　ガラス制作体験（ガラスの手型制作、風鈴絵付け、吹きガラス）（美大） ◎10/12 ～ 13　あきたガラスフェスタ作品展（アトリオン）

memo

平成25年10月12日開催
第5回ウェスターまつり
文化講演会では

「秋田公立美術工芸短期大学工芸美術学科でガラスを専攻した卒業生約100人のうち、35人がガラス作家になっているが、秋田に残って吹きガラスで活動しているのは一人もいない」とのお話もありました。

※新屋ガラスのイメージは？
◎湧水＝水の透明感、ガラスの器
◎風車の見える街＝風の透明感、風鈴

アトリエ

美術大学の学生、若手アーティストなどが、作品制作期間中に滞在できる短期滞在型のアトリエとします。

滞在中は、制作に集中できる環境とするため、自炊できる共同キッチンを整備し、アーティスト同士が交流しやすい施設として、人材のネットワーク形成も目指します。

「ものづくり」の現場を見てもらえるように、市民・学生が制作活動を見学できるアトリエを想定します。

ワークショップでは

- 表町地区の周辺の空き家は、住居や長期滞在に対応するシェアハウスとして活用することで、拠点施設のアトリエと役割分担してはどうか
- 地元（新屋）での起業を志す人を入居させてはどうか

ギャラリー

美術大学の学生、工房やアトリエ利用者の作品を展示できるギャラリーとします。

新屋で作った作品を気軽に見ていただける場とし、市民が日常生活の中で「ものづくり」の現場に触れることのできる機会を広げるものです。

工房
を中心に・・・

ショップ

作家が工房で制作した作品を販売し、作家が直接顧客とふれあえるスペースとします。作家が実際の使用者（作品購入者）の声を聞くことでスキルアップにつなげたり、商談のノウハウを学んだりする場とするものです。

また、美術大学の学生・卒業生の作品も販売することで、作家としての独立・起業に向けたノウハウを蓄積できるようにし、「これからのものづくり」につなげるものです。

「ものづくり」の精神を伝えるために、新屋の地場産品の販売も想定します。新屋には、湧水を活かした醸造業のほか、しょっつる・味噌・醤油など、これまでに培ってきた食文化の「ものづくり」があります。

醸造元など、表町周辺の各店舗とも連携したり、かつて新屋で製造・販売されていた清涼飲料水（ラムネ・サイダー）の復活など、いろいろなアイデア・地域活性化の動きにつながる場とすることを想定します。

アイデア（例）

目指せ！メイド・イン・新屋

◎地元作家・アーティストの作品を商品化する場合は、美大とコラボしたパッケージデザインなど、メイド・イン・新屋を目指してもよい

レストラン・カフェ

味噌やしょっつるなど、新屋の地場産品を使用したメニューを提供するレストラン・カフェがあれば、新屋を訪れた方に、ものづくりを体験してもらうほか、新屋の味を知ってもらうこともできます。

将来は、地酒やしょっつるなど、地場産品を使用したメニューの開発につなげたり、かつて新屋で作られていたうどんや白玉などを復活させるなどの夢も膨らみます。

また、地場産品を使ったメニューを、ガラスをはじめとする作家の器で提供することで、作家の認知度を高めるとともに、作品の使いやすさの把握などアンテナショップ的役割も想定します。

ワークショップでは

- アトリエの共同キッチンを利用して、地場産品を利用したメニュー開発のワークショップをやってもよいのでは？
- 昔はおせんべいやアイスキャンディー、サイダーなどが売られていた。ぜひ復活したい

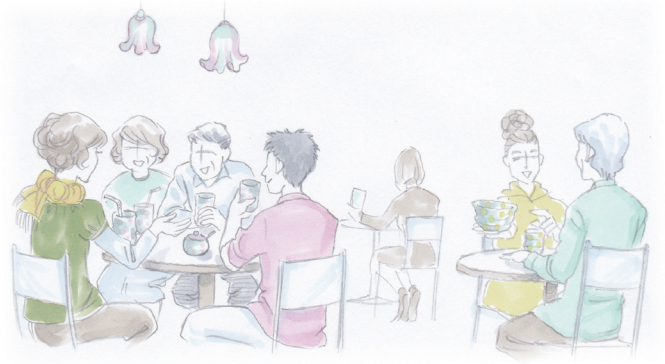
交流機能

「まちの魅力散策」案内カウンター

新屋表町地区には、湧水・町家など、地域資源が数多く存在します。まちあるき案内のカウンターを設けることで、しっかりと新屋の魅力を知ってもらい、何度でも訪れたくなるまちとのイメージを持ってもらいます。

案内をするボランティアガイドは、地元の方々が担い、自分たちも地域を知ること、そしてその魅力を伝えることで、ボランティアを育成し、また次の世代にしっかりと歴史・文化を継承する土台作りをします。

鹿島まつり、日吉神社山王祭など、新屋のハレの場では、まつりに関連した歴史紹介や展示を行い、観光面での情報発信もできます。



ワークショップでは

- 観光ガイドの育成により、地元の歴史の掘り起こしと伝承を。周辺の地域資源をめぐる観光コースをつくったらどうか
- 鹿島まつり、日吉神社例大祭も表町通りが舞台。まつりの時は歴史を紹介できればよい

憩いの場・地域交流の場

新屋は「湧水」の街です。施設の敷地内に湧水広場を設け、地元の方々、そして新屋を訪れる方々の憩いの場の整備を想定します。

水辺は地元の子ども達にとっても遊べる場所です。子どもの頃からものづくりに触れることで、新屋の歴史・文化を引き継いでいく場とします。

世代を超えた交流の場ともなり、お年寄りから新屋の歴史なども聞けるかもしれません。

ワークショップでは

- 湧水もあるので、公園に池を作ってはどうか
- 水場を作ることで子どもたちが集う場所になる
- 地下水を活用して、だるまポンプを置いてもよい
- 大森山動物園に遠足に来た子供たちが立ち寄れるようにしてはどうか

memo

- ◎隣接する渡辛さんの町家の活用も検討
- ◎敷地内で湧水（地下水）活用
- ◎憩いの場には子どもが遊べる水場
- ◎大型の駐車スペースで、大森山動物園から子ども達を誘導
- ◎表町に面する部分は都市景観の連続性を考慮し、町家など昔の表町通りを彷彿させる外観とする
- ◎「育てる」「創る」をイメージしたシンボルツリーを広場に植樹する
- ◎全体的に敷地内を散策できるよう、小規模な建物の集合体とする

3 まちづくりの「課題」

この基本構想は、地域団体からの提言をもとに、市主催のワークショップにより、作成を進めましたが、今後さらに具体的な検討が必要な課題もあります。

地域活動との連携について

まちづくり活動人口の増加

これからのまちづくりには、地元をはじめとする市民の主体的な参加が必要です。市民のみなさんが、地域の歴史や文化に目を向け、次の世代に引き継いでいく。自らまちづくりの活動に参加するなど、継続的な活動が求められます。

地域活動だけでなく、表町の商店街を活性化させる民間商業者の取組も必要となります。

美大の学生が求める画材屋・本屋などの専門店、また、学生向けの安い飲食店などは、まちづくりにあわせて民間事業者を地域に呼び込む取組が必要です。

表町周辺の町家の活用についても、所有者の理解を得ながら民間による仲介（マッチング）の制度をつくることが望ましいと考えられます。

こうしたことから、地元が中心となって、地域でのまちづくり活動を連携させ、人材育成につなげ、継続力のあるまちづくりを展開していく必要があります。

施設整備について

歴史ある町並みと調和した施設整備

隣接する町家や表町の歴史ある町並みと連続させ、新屋らしさを考慮した外観とするなど、「歴史・文化の継承」につながる施設となるよう、検討する必要があります。

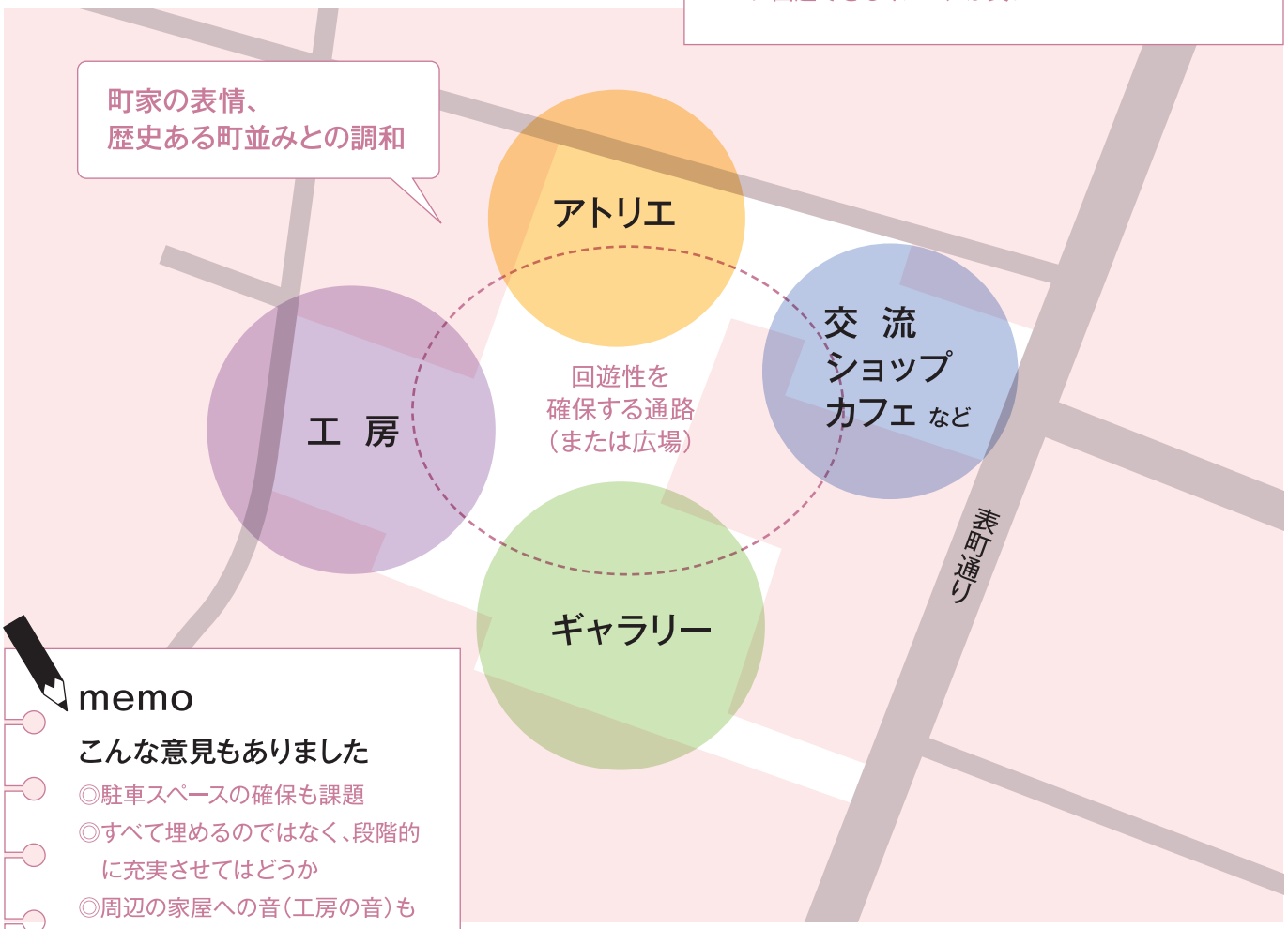
周辺の町並みとあわせた回遊性の確保、段階的な整備なども検討が必要です。

ワークショップでは

◎表町通りに面する部分は景観を考慮し、昔の「表町通り」を彷彿させる外観の建物としては？

◎敷地全体を散策できる公園の雰囲気とし、小さな建物の集合体とする

◎工房を中心にいくつかの建物を結んで町と一体的に回遊できるイメージが良い



memo

こんな意見もありました

◎駐車スペースの確保も課題

◎すべて埋めるのではなく、段階的に充実させてはどうか

◎周辺の家屋への音（工房の音）も考慮して…

◎低層の建物をつないではどうか

管理・運営について

幅広い主体の参加と役割分担

まちづくりを「ハード（施設）」「ソフト（活動）」「ネットワーク（交流）」として考えた場合、拠点施設は、市が整備し、市民・民間企業、美術大学などが中心となり、施設の管理・運営を行い、地域に愛される「活動・交流の場」として成熟させていくことが理想です。

また、美術大学の学生や若手アーティストの地元での起業につなげるためには、技術指導だけでなく、作家としての独立するための商売のノウハウを指導できる人材を置くことも考えられます。

こうした観点から、今後、基本計画をまとめる中で、具体的な管理・運営手法を検討していく必要があります。

役割分担イメージ

地元市民
自らまちづくり活動の担い手となり、歴史・文化の継承、「ものづくり」の精神の伝承に努めます。
地元商業者や、その他の民間事業者などを含みます。

公立美術大学
地域の一員として、地元市民、民間団体等と連携を図りながら、「ものづくり」の精神の伝承に努めます。

市
地元市民のまちづくり活動を支援し、活動の拠点となる施設整備を担います。

ワークショップでは

◎管理・運営は継続力が必要。地域や学生だけでなく、市と連携して母体（財団など）をつくってはどうか
◎最初は行政で、徐々に指定管理へ移行しても良い
◎工房など、内容が具体的になってから、それに応じた管理手法を検討する必要がある
◎使いやすい施設にするためには、管理・運営の検討は設計・建設と並行でやった方が良い
◎シェアハウスのように、民間でできるものはまちなかで

今後のまちづくりについて

管理・運営イメージ

▶歴史・文化エリア

歴史・文化の継承	
まちあるき案内（散策ルート）	地元 （観光案内ボランティア）
空き家の活用 （シェアハウス・アトリエ・ギャラリー等） ※アーティストの住居・長期滞在に対応	地元民間業者 ※所有者の理解を得ながら
地場産業や地元飲食店の連携による新屋の味（名産品）のPR	地元商業者
空き家の活用 （画材屋・本屋等の店舗兼ギャラリー）	地元民間業者・商業者 ※所有者の理解を得ながら

▶まちづくり拠点施設

ものづくりの精神の伝承	
工　房	市（または指定管理者）
アトリエ	
ギャラリー	
ショップ	民間商業者
レストラン・カフェ	
案内カウンター	地元ボランティア 指定管理者
憩いの場・地域交流の場	市（または指定管理者）

提案書では

◎美術大学、地元企業、地元住民等の協力を得て、可能な限り自立的な運営を目指します
◎空き家の有効活用は、例えば民間事業者と美大のコラボレーションによる建物再生や空き家の登録制度はどうか
◎美大のギャラリーや民間の漆工房など、民間の動きと連携した取組が必要ではないか

新屋地区では、これまでも市と連携した都市景観事業「参画景観」を実施しており、都市景観を保全するとの意識が根付いています。

平成25年度には東京芸術大学の中村政人教授を招き、表町の町家を活かしたワークショップを開催し、地元と学生にまちづくりの意識が醸成されています。

「あきたガラスフェスタ」「もの×まち さんぽ 手づくり品市」など、住民主体の地域活性化の動きも活発であり、この基本構想に基づき、まちづくりの拠点施設が整備されることで、美術大学の学生や若手アーティストの制作の場、作品販売の機会が拡充され、秋田在住の作家を育て、ものづくりの精神を次の世代に継承していくことにつながります。

こうした人材を育成することにより、作家と地元商業者やマーケットとのネットワークが太くなるだけでなく、作家同士が切磋琢磨することで技術も向上し、将来的にはガラスをはじめとする秋田ブランドの確立も期待されます。

エリア周辺の町家・空き店舗も、地元や民間事業者が主体となってシェアハウスやアトリエとして活用することにより、表町の歴史ある町並みを「生きた町並み」として保全するとともに、地域全体の活性化、将来的には交流人口の拡大にもつながると考えられます。

まちづくりの拠点施設での地域交流が日常的になることで、場所の共有（シェア）だけでなく、人・コミュニケーション・アイデアもシェアでき、学生やアーティスト、地元住民がお互いに成長し、まちづくりに関わる活動人口の増加にもつながるだけでなく、「芸術と文化の薫るまち新屋」として、活力のあるまちが実現できます。

新屋のまちづくりを通じて、どのような人材を育て、どのような文化を積み上げていくのか、そして、将来、自分の住む土地にどれだけの誇りを持てるか。この取組、そして「ものづくりの精神を伝承」する拠点施設が「新屋らしさ」をより確かなものにし、成熟した豊かな地域社会の実現につながることを期待します。

巻 末 資 料

◎新屋まちづくり基本構想作成ワークショップの開催状況

◎あらやまちづくり懇談会からの提案書
（平成25年7月1日）

新屋まちづくり基本構想作成ワークショップの開催状況

新屋まちづくり基本構想は、地域住民の皆さんなどに参加いただくワークショップを4回開催し、新屋まちづくり懇談会の提案書をベースにしながら、地元の意見を取り込んで作成しました。

会　　場	西部市民サービスセンター
参加申込者	34人
第1回	平成25年 11月27日（水）18:30 ～
意見交換内容	◎まちづくりとは何か ◎新屋のまちの姿、新屋らしさ（地域資源の確認） ◎まちづくりの方向性
第2回	12月19日（木）18:00 ～
意見交換内容	◎地域資源の活かし方 ◎まちづくりの拠点施設に求められる役割
第3回	平成26年 1月23日（木）18:00 ～
意見交換内容	◎拠点施設整備の適地 ◎地域資源のキーワード ◎具体の施設機能
第4回	2月20日（木）18:00 ～
意見交換内容	◎まちづくりのコンセプト ◎施設の管理運営 ◎施設機能のイメージ

秋田公立美術大学を活かしたあらやのまちづくり（案）

平成25年7月／あらやまちづくり懇談会

■ 現状・課題

(1) 秋田市では・・・

秋田市では　様々な資源を活用しながら、「にぎわいや」「秋田らしさ」を創造し、都市イメージ「ブランドあきた」を確立することにより、人や企業の定着と交流を促し、さらなる成長を促進する取り組みを進めています。

(2) 新屋地区では・・・

新屋地区においては、住民の高齢化や商店街の衰退が進み、歴史あるまちなみにも空地や空家が目立つようになってきました。

新たに開学した秋田公立美術大学を貴重な地域資源ととらえ、歴史ある建物、湧水、醸造の文化、大森山動物園など他の地域資源と連携させながら、活性化を図ることが求められています。

(3) 公立美大では・・・

25年4月、秋田公立美術大学が開学いたしましたが、卒業生の地元での雇用の場は限られており、その対応が急務となっています。

また、卒業生の中には、アーティストになることを目指す学生もいますが、プロとして独立するには、実践を通じて、商品開発や経営のノウハウを学ぶことが不可欠であり、秋田以外に修行の場を求めるケースが多いのが実情です。

空地になっている新政酒造跡地
- 古い町屋が点在する新屋表町通りのほぼ中央
- 美大とJR新屋駅から等距離にある交通の要所

▲新政酒造跡地

▲旧渡辛商店

▲ひろ建築工房（イベント時）

▲参画屋

▲実相寺湧水

▲公立美大実習棟

■ 対　応

(1) 新政酒造跡地では・・・

- 公立美大を活用したまちづくりの核となる施設として、新政酒造跡地に、公立美大の卒業生をはじめ、アーティストの卵たちが働きながらプロとして必要なノウハウを身につけることのできる起業支援型工房の整備を提案します。
- 工房のあり方としては、①運営主体がアーティストを直接雇用し、作品の制作販売、体験教室、調査研究活動、各種受託業務などを行う直接雇用タイプ、②優れたアーティストに、低廉な家賃、期間限定で施設を貸し出すレンタルタイプが考えられます。いずれの場合も市民とのふれあいを大切にした簡素で開放性のある工房とします。
- 関連施設として、①制作された作品や地場産品を活かした店舗、②飲食店、③ギャラリー、④アーティストや美大生のためのシェアハウス、⑤憩い・防災・イベントなどに使える緑と水の空間などを整備することにより、新たなまちづくりの拠点を創出します。

(2) 周辺の古い町屋については・・・

- また、周辺の古い町屋を、店舗・飲食店・ギャラリー、シェアハウス等として再生し、低廉な料金で貸し出すことにより、にぎわいをまち全体に拡げるとともに、歴史的なまちなみの保存にも役立てます。

(3)その他の地域資源については・・・

- 優れたアーティストの定着と交流を促進し、さらに、公立美大、大森山動物園など、他の地域資源を活用した各種事業を一体的に推進することにより、芸術文化が薫るまち「あらや」を実現しようとするものです。

■ 周辺の古い町屋の活用と保存

見る
- ギャラリー

住む
- シェアハウス

食す
- 地場産品や作品活用

憩う
- 緑地
- 湧水を活かした水辺
- イベント広場（朝市、フリマ）
- 大型モニュメント

育てる
ー起業支援型工房ー
①直接雇用タイプor ②レンタルタイプ
※簡素で開放性のある工房

買う
- 地場産品
- 作品

■ 新政酒造跡地の利活用（核施設の整備）

⇩

優れたアーティストの定着と交流を促進

⇩

芸術文化が薫るまち「あらや」

⇧

■ その他地域資源の利活用

自然資源・・・・・日本海／雄物川／大森山／新屋大川端帯状近隣公園／湧水etc
歴史資源・・・・・余楽庵／栗田神社／日吉神社／忠専寺／天龍寺／実相寺etc
文化的資源・・・鹿嶋祭／日吉神社山王祭／花火大会／桜祭り／醸造文化etc
観光資源・・・・・大森山動物園／秋田リバーサイドグリーン／新屋温泉etc
人的資源・・・・・美大の教員・学生／地域団体／NPO参画屋 etc

■ 効　果

- 公立美大の卒業生が秋田に残るチャンスを拡げるだけでなく、既に秋田を離れたアーティストや、全国で活躍中の優れたアーティストを呼び込むことが期待されます。
- 人を育てることは時間のかかる作業ですが、育った人から愛着を持ってもらえればチャンスが生まれます。
- 大森山動物園、湧水、醸造の文化、歴史ある建物など他の地域資源と連携させることで、観光はもちろん、子供たちの教育にも役立つ施設となります。
- 歴史ある建物に利活用の機会を与えることにより、貴重な地域資源を生きた形で保存することができます。

■ 進め方

1　取り組みの基本姿勢

事業を進めるにあたっての基本姿勢は次のとおりとします。

あらやらしさを活かす

らしく
みんなで
だんだん

地域との交流参加を大切に

じっくり育てる成長型の事業

※　ただし、新政酒造跡地の土地取得は緊急課題です。

2　取り扱う芸術領域

ガラスアーツフェスタなどで市民の人気を集めているガラス工芸を中心に、徐々に他分野に拡げていくことを想定します。

3　施設運営

工房では積極的に営利事業に取り組むとともに、公立美大、地元企業、地元住民等の協力を得て、可能限り自立的な運営を目指します。

■ その他のアイディア

その他、こんなアイディアも出ています。

- 新政酒造跡地には色々な工房を配置するスペースがある。屋根と壁だけをつくり、あとは自分達でというやり方はどうか？
- 空屋を有効活用。例えば民間事業者と美大のコラボによる建物再生や空屋の登録制度はどうか？
- 核施設に余楽庵、新屋の町章などをデザインしたモニュメントを設置し、ミニチュアを街灯に展開しては？
- ギャラリー的なスペースで、新屋地区の歴史や、かつて作られていた地場産品（うどん、白玉、塩etc）の紹介や、旧家に残っている古い価値のあるものを展示しては？
- この機会に日吉町から降りる道路を整備しては？
- 秋田にない物を無理してPRする必要はない。他県のまねても未来はない。湧水を活かして「水の街」をテーマにしては？
- 美大ぎゃらりー＆漆工房「秋田あらや小町」など、民間の動きと連携した取り組みが必要では？

事例1　直接雇用型の工房

ー富山ガラス工房ー

◇整備主体　富山市
◇運営主体　(財)富山市ガラス工芸センター

1 目　的

① ガラス工芸を担う人材の育成及び自立支援
② ガラス工芸・ガラスアートの普及啓発
③ ガラス工芸の産業振興

2 経　緯

・S60. 9　富山市民大学にガラス工芸コースを開設
・H 2.12　富山市総合計画で、工房建設を位置づけ
・H 3. 4　富山市立市民学園「富山ガラス造形研究所」設立
・H 6. 3　(財)富山市ガラス工芸センター設立
・H 6. 4　富山ガラス工房を開設
・H 9. 4　富山ガラス個人工房を開設
・H16.10　創作工房・ギャラリーを増築
・H22. 3　富山ガラス工房宿舎を建設
・H24. 9　第2工房を開設

3 活動内容

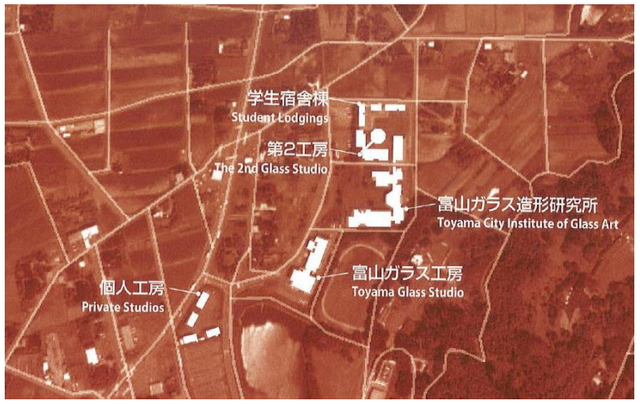
(1)ガラス作家の育成
研修生を雇用し、3年間で、高い技術と表現力と合わせて、プロ作家として独立するために必要な知識(設備の維持管理、工房の経営、販売ネットワークの構築等)を身につけさせる。

※研修生(現在12人)には賃金を支給するほか、自らが制作した作品が売れた場合20%を手数料として支払う。

(2)地域産業化
ガラス作品の制作販売、作家の独立支援、定住化促進、市場開拓を行い、文化の香り高い創造的な観光資源としての活用も含めた総合的な地域ブランド構築を目指す。

(3)文化創造・市民参加
ガラス文化の裾野を広げ、より多くの市民にガラスの魅力を伝えるため、様々な参加型イベントや講座、展覧会、人材交流等を実施する。

(4)連携事業
金属、漆、木工、和紙等の異素材分野や大学・民間企業との共同研究、デザイナーやアーティストとのコラボレーション、様々な団体や組織で構成される地域振興プロジェクトへの参加などのほか、人材交流事業や各種イベントを実施。



4 施設概要

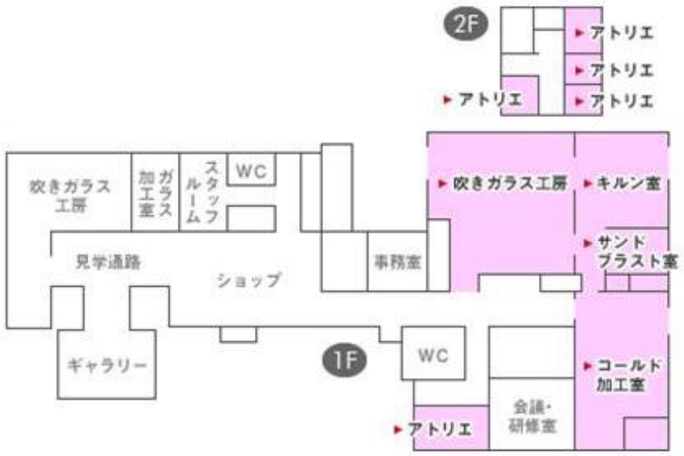
(1) 富山ガラス工房
構造・規模　RC造平屋建、延べ面積 約1,617㎡
事 業 費　当初 約250,000千円、H16増築 約370,630千円

(2)第2工房
構造・規模　鉄骨造一部RC造2階建て、延べ面積 約1,079㎡
事 業 費　約352,664千円

5 運営体制(H25予算ベース)

(1)職員数　31人
(監督2、管理2、営業企画6、共同創作工房10、第2工房11)

(2)年間支出	約314,473千円	事業費	296,106千円
		管理費	16,977千円
		その他	1,390千円
(3)年間収入	約314,473千円	基本財産運用益	17千円
		事業収益	225,775千円
		補助金収入	73,921千円
		雑収益	13,370千円



事例2　レンタル型の工房

ー台東デザイナーズビレッジー

◇整備主体　台東区
◇運営主体　台東区

1 目　的

台東区の地場産業であるファッション関連のアクセサリー雑貨の活力、競争力を高めるため、新進デザイナーに対し創業支援の場を提供する。

2 経　緯

・H13.8　台東区が台東区小中学校跡地庁内研究会を設置
・H14.10　創業支援施設としての活用を決定
・H15.3　小島小学校閉校
・H16.4　施設オープン(5 年間の暫定利用)

3 施設概要

・1 階・2 階　デザイナーの入居スペース(公募による18 組が入居)、ショールーム、商談室、早稲田大学のプロジェクト研究会
・3 階　東京芸術大学のアトリエ
・校庭　民間の駐車場に賃貸
・プール　蓋をして入居者のイベントスペースに利用きるように工夫

4 事業費

180 百万円(うち95 百万円を国と都からの創業支援施設補助金)

5 運営体制

区が運営・管理を行っているが、インキュベーションマネージャーは全国公募により 最も本施設の目的を達成するにふさわしいファッション業界出身の民間人を選抜。この結果、入居デザイナーのサポート、イベントのプロデュースや区内企業とのビジネスマッチングなどの各場面で、ファッション業界に精通した民間人ならではのキメの細かい創業支援が行われた。

▲ 校門・校舎

▲ デザイナーの入居スペース

▲ 校庭は民間の駐車場に賃貸

新屋まちづくり基本構想
平成26年3月発行

［編集・発行］
秋田市企画財政部企画調整課
〒010-8560 秋田市山王一丁目1番1号
TEL. 018-866-2032

［デザイン・印刷］
株式会社アートシステム
〒010-0951 秋田市山王五丁目15番33号
TEL. 018-863-2652（代表）